

# 資料渉猟余話

その142

今回は美術誌『伊那之華』に掲載された絵を中心にみたが、今回は書を中心と考えてみたい。

作品は絵画同様、書軸・扁額・屏風等いろいろに表具されているが、作品数では絵の四分の程度である。つまり、第壹號では六点、第貳號では五点、第參號では七点の計十八点である。

と、江戸時代の儒者が多いことに気がつく。今、時代別に記すと、以下の通りである。

まず江戸前期の儒者として、陽明学を学び岡山藩に仕

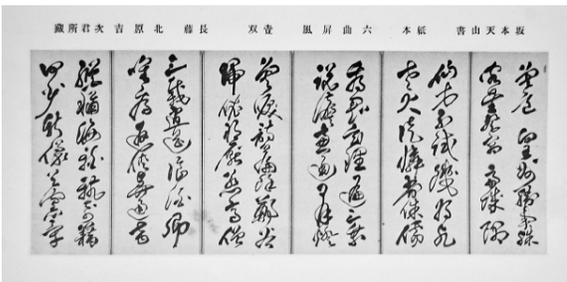
## 明治末の美術誌『伊那の華』下

～掲載の書について～

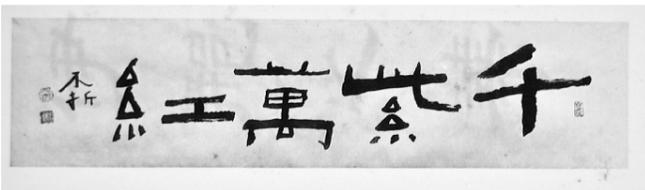
鎌倉 貞男

と、江戸時代の儒者が多いことに気がつく。今、時代別に記すと、以下の通りである。

まず江戸前期の儒者として、陽明学を学び岡山藩に仕



坂本天山の書（屏風）



中村不折の書（扁額）

川星巖（一七八九～一八五八）である。八～一九二二）でいづれも一世を風靡し、後世に知られた儒者であるだけに珍らしい作家として、この時期もなお尊敬され、書も人気も高かったと思われる。そうした関係で言くと、県歌「信濃の国」にも登場する飯田出身の儒学者太宰春台（一六八〇～一七四七）の作品が三、幕末の文人画家で洋学者と言われる人の書の渡辺華山（一七九三～一八四一）である。古来、名筆と言われる「三筆」(嵯峨、空海・橘逸原行成)はともかく、時代的に近い「幕末の三筆」(市河米庵・貫名海屋・巻菱湖)や「幕末の三

舟(勝海舟・高橋泥舟・山岡鉄舟)ぐらいはあってもよさそうであるが、実は一作品も無い。今日とは違つ価値観が働いたと思われる。それにしても、当地にはいろいろ名品があったものである。最後に書・画共にみると、江戸よりも京都、関東よりも関西の作家の作品が多いことに気づく。このことは、その頃まで当地の生活圏や文化圏は、どちらかと言えば関西圏が主流であったということだろうか。